

宍粟郷土研究会報

No. 29

42. 11. 20
兵庫県宍粟郡
山崎町
教育委員会内
宍粟郷土研究会
電話750番

宍粟鉄山の経営者(三)

鉄山師 鳩屋孫五郎

宇野 正 碩 (昭和)

鉄山師千草屋源右衛門が、宝暦八年には京都に出てしまつたことは、前回に述べたとおりであるが、その後を請負つたのは誰であろうか。「巡検便取成覚書」(宝暦十辰年)が最も簡潔に答えていると考えるので、次に掲げる。

○ 宍粟鉄山

一天小屋山壱ヶ所 山崎町 みなとや (湊屋) 徳兵衛、
西河内之内ニ御座候 但シ山ノ川岸迄九里余
一赤西山壱ヶ所 御料須賀村 孫右衛門 原村ノ内ニ御座候 但シ山ノ出石川端迄八里半
右のように、宝暦十年には、湊屋徳兵衛と鳩屋孫右衛門の二家が、千草屋を継承している。
湊屋については、その後十七年ほどの後に(安永六年)早くも不如意となつたが現在のところ、不明の点が多く、

目次

宍粟鉄山の経営者(三)	宇野 正	1
生ける珠	島下八重子	3
黒田官兵衛と山崎	中村 潔	5
風月集と素練(二)	多淵 健次	8
天の橋立秋季見学旅行		11
総案内		12
雑報		12
会員名簿(24)		12

今後の史料発見を待たねばならぬので、鳩屋孫右衛門について考えてみたい。

前出の「巡検便取成覚書」の赤西山壱ヶ所として、鳩屋の名が現われる前に、鳩屋が文献に見られる。それは、千草屋が財政不如意になつた宝暦六、七年の時である。
丁度、その項には、これらの鉄山地域が、幕府領から一時、三日月乃井野藩に預けられた時であるが、乃井野藩としても、鉄山からの運上銀が杜絶することは財政上打撃となり、又関係村々の生活難も考え急ぎ後継者を探したものと考えられる。

すなわち、千草屋が、宝暦五年十一月より宝暦八年十月迄三カ年間の請負をして、宝暦六年分（1/3）だけ上納したが、残り2/3の運上銀の上納が見込無しと見た乃井野藩が、残り二年間の請負を鳩屋孫右衛門に継承するよう交渉したと解される点がある。

「……（前略）兩年分御運上引請相稼候様被仰付奉畏候」「再応御吟味之上被仰付候」

などの文言はこのことを裏付けると考えられる。

要するに、鳩屋はこの頃すでに、かなりの経済力を有した家筋であつたわけで、鉄山師以外で、須賀村（幕領）に居住して、財力を蓄積していたのである。

その職種は明確に知りえないけれども、

「私儀右等（鉄山のこと）之稼仕候儀、無御座候得共

右山附キ村々之儀 外商売ニ而村方之様子茂奉存罷有候ニ付」（宝暦六年の文書）

など、山林関係の商売と推察されるし又、

「雑木座とも旧来請負候」（天保初期の文書と考えられるもの）

とあるところから、薪炭の商売とも考えられる。

しかも、鳩屋が請負つた理由は外にもある。鳩屋は、単に自己の利益ばかりを考えず、鉄山閉鎖ともなれば、収入源を失うことになる関係の村々の住民の生活困窮を考慮に

入れての請負であつた。

「鉄山稼相止ミ候而は 山附村々衰微ニ茂相成候儀ニ候間連而相稼候様被仰付候ニ付御請奉畏候何分相稼候様ニ可仕候」

右の文書では、千草屋鉄山師の後継をするについて、別段、鳩屋に成算があつたとは考えられず、鉄山労働者の収入と 鉄山関係の村々の農民の副収入源が絶たれては、村の衰微、ひいては、乃井野藩の苦衷を見逃せないという商人としての義侠心が、鉄山請負に踏切らせたものである。

× × × × ×

いわば、義侠心から、鉄山を請負つたが、鳩屋の従来からの財的優勢か、経営能力のすぐれていたためか、湊屋が早く没落し、鉄山を手離したにもかかわらず、幕末まで約百年間、鉄山経営を行い、一時苦境もあつたが、隆盛を迎えた。

鳩屋が、宝暦以降、稼行した鉄山は大略、次の通りであつた。

三久庵（現在、引原小学校円形校舎付近）

音水山（音水部落の営林署事務所的位置）

万荷谷山（摩尼ヶ谷とも言ふ。日ノ原部落東方の国有山林）

林）

赤西山（赤西国有林の谷）

滝谷山（波賀町野尻、西北方の谷）

広路山（波賀町野尻、東方の谷）

高羅山（千種町東河内出合の東南方の谷）

鍋ヶ谷（千種町西河内郡落西方）

天児屋山（千種町西河内郡落西北方）

内海山（千種町岩野辺東方、波賀町境）

榎木山（一宮町西公文の小原の北方の谷）

等々で、これらに対する運上銀も、毎年拾二貫目であつた。

★ ★ ★

前項にも、鳩屋孫五郎が、義侠心から鉄山請負を決心したことを述べたが、更に、そのことを裏書するような事柄について述べたい。

天明年間は、三年、四年、五年、六年と教ヶ年続いた大飢饉で、米価騰貴も甚しい所謂天明大飢饉が起つた年で、勿論、安栗郡とても例外ではなかつたので、鉄山関係の村、殊に、田畑を所有しない鉄山集団の労働者の食料に事欠く状態となつてしまつて、米、麦の現物がないたため、金銭の高低にかゝらず、入手は全く困難となつてしまつた。正義感に富んだ鳩屋孫五郎は、因幡、但馬、美作方面に出かけて食糧となりうるものは、何でも集めて帰り、鉄山集団関係者千人余りを飢から守り、鉄山稼の継続をはかつた。又、村万へも飯米の世話をしている。この時にいろいろ世話をうけた村々は、原、引原、野尻、飯見、上野、皆

木、有賀、斉木、安賀、東河内、西河内、河呂、岩野辺、室、西山村などであつた。そればかりか、鳩屋は、上述の村々が年貢銀の上納もできなくなつたので取替を依頼されると、従来から関係のある村々のことではあり、難渋を見て見ぬふりもできず、又、御上様に対しても恐れ多いことと考へて困窮の百姓の中を三分を立替へて上納している。このことは、いよいよ鳩屋の経済力の偉大さと、義侠心を示すものといえよう。

随筆

生ける珠

大阪島下八重子

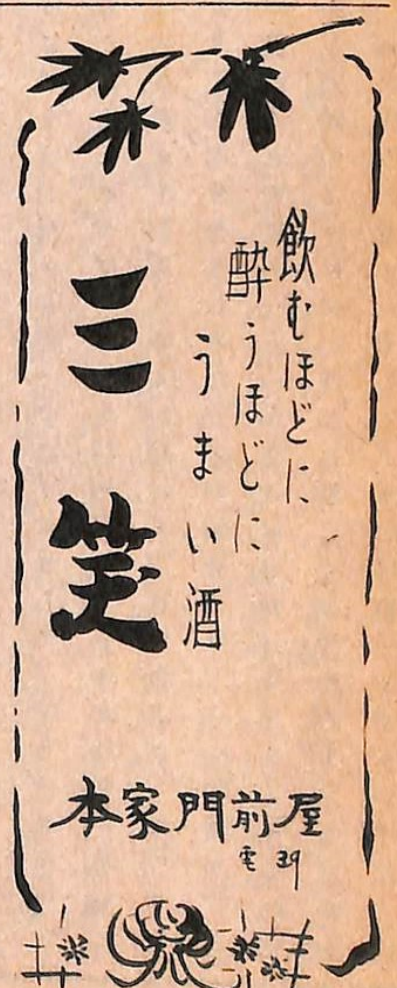
人形の鶴子はわが家へ来てからさえ二十二年になる。戦災で玩具の全部を失つた私の娘を憐れがつて、焼けるまでの隣組だつた魚松の、古稀の祝も済まされたお鶴さんという名の御隠居が下さつたもので、「おばあちゃん初節句のとき親類から祝ってもらいはつたものやそうです。大事にして疎開させてはつたから焼けずにすみました。どうぞお宅で可愛がつとくれやす」と、牡丹の蒔絵も華やかな雛の膳碗や三宝を添へて御寮八さんが届けて下さつたとき、飛びつくように人形を抱きしめた三才の娘を見て、「松に鶴か、目出度いことやなあ」と一から出直さねばならなくなつた父が、冗談のように云いながら淋しく笑つたのを今も忘れぬ御隠居の厚意を記念して人形には鶴子と名をつけた。幼

いときは抱いたりおぶつたり、学生ともなれば机上に飾つたりで、一尺五寸の市松人形は益々古びていつたけれど、すべすべとした肌、凜とした表情に明治初年を偲ばせて今も美しい。この春娘は他家へ嫁ぐことになり、前原一掬作童形の尉と姥を叔母から祝われて嫁入道具がはんなりした夜、鶴子を改めて膝に乗せて、「これ形見にここへ置いてゆくわね。お母さん一生可愛がつてあげて」といつた。

「あゝ、私が死んだら又あなたお貰いなさい」と私は云いつつ、娘が歳月を経たものを大切に癖はこの鶴子がつけてくれたのではなからうかとふと思つた。

娘が出て、二才の孫の相手をぼんやりした日々が重なる、無性に匂いやかなことのでしてみたいときがある。私は鶴子の着物の洗濯を思いついた。松藤楓などを扇面に染めた友禅の着物を脱がすと、緋縮緬に桜を白く抜いた裾除けをして、胴に巻いた生漉の紙に奉菊齋と職人の名が書かれてあつた。下腹部に小さく愛らしい童女のしるしが刻んであるのが、枯れ切つた老人の仕業のような気がして私は思わず微笑してしまつた。「鶴子ちゃん、ええ顔してはる」と何べんとなく娘のいつた顔を上げしげしげ見ていると、きつと結んだ口許からの連想だろうか。ふいに山崎城下の千本屋にあつた井上医院のお家さんを思い出した。

私の祖父は明治中期まで紺屋を営んでいたが、化学染料や機械の発達につれて昔ながらの商売に見切りをつけ、新



飲むほどに、
酔うほどに
うまい酒

三笑

屋前門家本

道路建設に熱中したり材木に手をつけたりしたが、不慣れでもあり事業熱に運が伴なわなかつたのだろう。晩年は大阪へ居を移した叔父の仕送りひつそりとその井上医院の離れを借りて暮らしたので、私は千本屋へゆく毎にお医者のお風呂に入れてもらい、お家さんにお菓子を頂くのがきまりになつていた。床の遠い棚に南方の大きな具を飾り、つばめが賑やかに出入していた家が不意に失くなつて、蔵と金木犀と柿の木だけが残された屋敷跡は、やがて祖母の気鬱さめの畑に変わつていつたが、十才位の私は何のことやら判らなくて、気難かしい祖父の顔を見ているより、お医者のお茶の間でお雛さんみたいな上品な顔をしたお家さんとお話している方が楽しかつた。只困るのは先生が時折肉へ這入つて来て、大きな手で頭を撫でて下さることで、怖くてたまらなかつた。祖母にそれを訴えたと「何の怖いことがあるものか。あんな偉い先生はありはせぬ。先生は患者さんに上げる薬を一々なめてみてからでない」と獲しはしな

さらぬ。用心深いお方ぢや。」と賞めた。又ある時はお家さんが塗の食籠をねえやんに持たせて「塩味はこれ位にとより云うんやで」とくどい程云われたことがあつたが、ねえやんについて行つたあの竹の葉ずれのする家には腎臓を病む人でもあつたのか。新生児をとり違える病院や、劇薬を売つて慌あわてて広報車の御厄介になる薬局があつたりする昨今、思えば井上先生は薬師如来が緑の野辺に置かれた一粒の珠だつたのではなからうか。御美子がなくて今は跡形もないだけに一人ひとその感が深い。

黒田官兵衛と山崎

中村潔

群雄争覇、天下争乱の坩堝であつたあの戦国の世に、その叡智謀は遙かに他を抽いて、才氣胆略共に戦国随一と謳われ、その大器、その偉さは秀吉、家康の上だと賞讃された「黒田官兵衛孝高（如水）」。今日この偉人のあとを振りかへり、この英傑の歩んだあとを究めれば究める程、全くその偉大さにただ瞠目驚歎の外ありません。

如水の生涯につきましては、大方の皆様が既によくよく御承知でありますので省略させて頂きますが、彼の傑出したし偉材であつたと云うことは、かつての彼の主人であり後に天下統一の覇業を成し遂げた太閤秀吉が、大阪城に於

けるその晩年に、側近の家臣の前で、「万一このわしが今死んだら次の天下を治むる者は誰と想うぞ。」と問いを発した。家臣達はこの不意の質問に互いに目を見合わせ、憚り躊躇している時、秀吉はズバリ「わしの後の天下を掌握する者は余人でない、あの跋跋（ちんば）」だと云つてのけたと云う逸話が残っています。

然し時運はこの秀吉の予言に反し、他の一方の旗頭家康の手にお鉢が廻り、徳川幕府の開幕となつた。家康とて之れ又名うての逸材、人を観るの明又抜群、「英雄の心よく又英雄が知る」で、家康は幕府樹立に当り、如水に対し辞を低うして、新幕府の政治顧問となることを懇懇した。しかし、さすがは如水、固くこれを辞して、江戸を隔てること速い西域の九州太宰府に閑居の日を送っていた。

一方家康は如水及びその子長政の関ヶ原に於ける輝かしく大きな功績を認め、筑前博多の地に五十二万石を授け配した。慶長五年十二月如水、長政は直ちに福岡博多の地に入国した。やがて長政の手によつて新福岡の地に「無鶴城」が完成し、以来二百七十年、北九州の治平をよく固め、言葉通り「鎮西の雄」として明治の世に至つた。如水は新城の完備と共に、ここに人り感ずる所あり、その施政治藩の一切を長政に譲り、自らは花鳥風月を友として、慶長九年三月三十日、当今から見て五十九才と云う惜しい年輩で、城苑の梅花の散り行くのと同じくその華麗で而も波瀾に富んだ

生涯を閉じたのであつた。辞世に

おもいおく言の葉なくてついに行く

道はまよハしなるにまかせて

碑は福岡の崇福寺にあり、法名は「龍光院殿如水円清居士」その墓は京都大徳寺内龍光院にあります。

こゝで筆者の拙い考証で恐縮ですが、官兵衛の号「如水」は右の辞世の一首に見らるゝ通り、「凡て大きな時勢に従う、無理押しは一切破滅の基、水はよく方円の器に従うの真理をよく汲み取つてつけたのではないかと思ひます。誠に至妙至玄、正に達人の心境をよく写し得ていると思ひます。

私はずつと前々から、この英傑如水は、その晩年こそ、九州福岡であつたと云へ、彼こそ我が播州の姫路姫山の構居（黒田家の居館）に雄々しく呱呱の声を上げ、こゝに育ち、こゝで成人した生粹の播州人であります。天文十一年十一月、まだ、もみじの朽ち葉の残る姫山に、珍しく大雪が降り、播磨一円の野も山も、白皚々の新雪に蔽はれた折から黒田の館（やかた）は、目出度い長子の誕生で沸き立つような喜びに包まれていた。家臣一族皆この瑞兆を喜び、黒田の家運の隆盛疑なしと、この英雄の誕生を喜び合つた。かくて、それから幾春秋。如水は御着城主小寺氏の家老を経て、後年羽柴秀吉の中国征伐出軍に当り、先づ播州平定の拠点として、姫山の居館を秀吉に提供し、爾来、

設計 監督 田中建築士事務所

山崎町西鹿沢
TEL 四七八

竹中半兵衛と共に秀吉幕下の軍略智謀の主として、活躍したことは、御承知の通りであります。

やがて播州一円の平定も、ほど完了し（我が実粟の長水落城の悲史も勿論これに含まる）愈々中国の毛利征服の半永久的の拠点として、如水は、やはりこの姫山の地に、秀吉に勧め、始めて「三層の姫路城」を築いたのであります。これこそ真の姫路城の始まりであります。今日天下の名城として、今次大戦の災火も免れ、戦後大飛躍発展を遂げつつある姫路市の基礎はここに固く築かれたわけであります。所が、今日姫路城を見物に行きましても、この如水の三層構築の恩は忘れて、これを五層に改装した池田輝政の名のみ喧伝されて、この播磨の産んだ一大英傑、我が播州今日の発展の基を築いた如水の記念碑一基すらない現状に対して、私はいつも少からぬ不満と愛惜を抱く一人であります。郷土人として、その郷土の産んだ偉人を崇敬し景仰しそれを誇りに持ちますことは、いつ迄も後の世の龜鑑

として、今日の目まぐるしいドライな世相から考へましても、それは単に懐古趣味とけなされるものでなく、大いに意義のある緊必なことと痛感してやまぬ次才であります。前書きが大変長くなりましたして失礼いたしました。今日の拙文で私の述べようとして居ります主眼は次ぎの通りでございます。

さて本論に入りまして、上記のこの黒田官兵衛孝高と山崎の地が非常に関係が深い、いや深い所ではない。あの戦国の真只中に、秀吉は官兵衛の多年の功績を賞でて正式に秀吉幕下の一方の旗頭として搦東（搦保）実粟その他の地を合はせ老万石を与え山崎領主に任命したのであります。天正八年（一五八〇年）九月一日のことでした。こゝに官兵衛は始めて一国一城の主に進出したわけでありまして。如水に従い、歴戦の辛苦を嘗めて行を共にして来た栗山善助、母里太兵衛、井上九郎次郎の老臣達を始め父の宗内一族の者達何れも今迄の困苦多難の道を今更省みて涙を流して喜

食料品卸小売

有限会社 寺田商店

山崎町紺屋町 電五番

んだのであつた。家中一統のこの喜びを機として、この時始めて、黒田家の「軍旗」と云うものが創られ、いとも盛大に軍旗祭が取り行はれた。戦風陣雨の幾才月をくぐり、今更に今後の天下の治平の為に、不惜身命の決意を新にした旗印しが作られたのですが、それは恐しく大きなものであつた。

練絹三幡、長さ二丈余、上手各一尺五寸を黒く染め中は白地として、上部に永楽銭を描きその上部に長さ三尺の吹き流しをつけた。同時に作られた「馬印」も実に見事なものであつたらしい。

これを総社の神前に並べ七日間警固の武士をつけ神前に宣誓祈願の宣詞を言上、御神酒を捧げての盛儀であつた。私はこの大旗の幾つかをかざして騎鼓堂々と、最初の山崎城主として如水が多くの家臣を連れて、今の国道二十九号線あたりを北上し我が郷土山崎へ入城すべく進んだであろうその美しく勇ましい絵巻物のような行列の姿を想像し、ほゞ笑ましい胸のしまる想いをする次才であります。

以上如水の旗印を記述しました序でに、黒田家の家紋について述べさせていただきます。これにつきまして、私、色々と調べましたが、今一つ不審な点がありまして、今から十数年前、丁度、県の方へ行かれました、私のこの方面の大先師を仰いでいます島田清先生に問ね。又赤松氏研究のオ一人者であり古史古実に御造詣の深い河東神谷の栗山

藤乃丸
最上もが
鮎しな

や 荒木菓舗

和洋菓子

山崎 電話一七〇

宗知さんにも伺い、色々御教えいただき判明いたしましたので、やはり孝高（如水）の時、藤巴（藤房三つと中央に橘の簡素化したもの一つ）に改められたのであります。即ち「橘」の紋の裏の文（あや）を除き、又その五葉のうち二葉もとつてしまい、残り三葉を三方に出し、その葉の間から藤の房三個を出しこれを藤巴でかこんだ恰好のもので一寸見ますと本願寺の寺紋によく似て居ります。

官兵衛が「橘」からこの家紋に改めたのにも仲々深い因はれのあることを知りこれ又驚いて居ります。勿論これは伝説の域を脱し得ないのですが、如水なら、ありそいなこと、思考されるわけでありませう。それは御高承の通り如水が、御着城の家老として伊丹城に使いしました時、老獪な城主荒木村重に謀り因えられ城内の牢に入れられて居た時のこと。僅かに牢内の高い小窓から見える「藤の花」に幽囚の憂き心を幾分でも慰められ、又一方如水救出に奮命し

ていた忠臣達がひそかに送り込んだ女中が牢内の如水に連絡した藤菓を彼の出牢後、彼自身恩儀厚い「藤」をいつ迄も忘れないよすがとしての改紋であつたとする故実であります。今更に如水の入柄の床しい半面と、その人徳の凡でなかつたことが偲ばれ、心温まる一つのエピソードであると思ひます。

最後に私はこの拙文を読んで下さつた皆様を通じまして、「如水」には「山崎城主時代」があつたので、当山崎附近のどこかに、この如水なり黒田家に関係由緒ある、古文書か遺物か遺蹟が残つてゐるのではないかと思ひます。何分古い昔のことであり、且つ戦乱匆忙の時ですから如水が山崎に実際に滞在した期間は少く實際は如水の父の「宗円」が隠居役として山崎に居た日が長かつたらしいのですが、いづれに致しましても、何か黒田家時代の遺物が山崎附近に残つていて当然に思ひます。次才、若しいさゝかにも、そうしたことをご存知の方は、恐れ入りますが御一報御教示賜ります様お願い申し上げます。筆を擱きたいと存じます。

風月集と素練(二) 多淵健次

鳥部

声遠くなりて猶淋し閑子鳥

たまたまに笈の音やかんこ鳥

一 蛙
五 友

月落て啼出しけり時鳥
 郭公石につまつく峠かな
 曙の雲ハちきれてほととぎす
 郭公聞間もせわし下り舟
 ほととぎす啼て三日月見付たり
 留守の戸を折々たたく水雞哉
 一こへにまた振りかへる時鳥
 巢かよひに連も誘ハす千鳥哉
 郭公聞や旅寝の仮り枕
 我耳の日々にあたらし郭公
 かけ見へぬ闇のみたれや蜀魂
 子規耳にあふなし一つ橋
 しのふ身ハ気かゝり多し行々子
 夜嵐の行衛ハ小田の水鶏哉
 そほ降りて淋しさ叩く水鶏哉
 舞あかるきほひハいかにねりひはり
 僧ハたたく跡を月下のくゐな哉
 八月をおしむ高音や時鳥
 風鈴に折々風の薫りかな
 涼しさや清水なくとも柳かけ
 松一葉落て地にたつ暑かな
 丸呑に野陣の飯やほととぎす
 苦舟の尻こそくるや行々子

仙台

兀仙 寿硯 魚潜 玉雅 枝雪 釣掌 谷戸 素白 芦中 杉丈 東水 等花 六合 巨泉 友山 咫石 子好 周羽 雪集 静波 文穂 素朝 素巖

保輔かしのひし道を行々子
 蚤に病夜ハ脊戸からも水鶏哉
 よしきりや昼飯運ふ手繰舟
 偕老もかくてハ佗し夏の鴛鴦
 麦秋の朝起連や行々し
 近寄れハ水音に猶行々子
 人の気も遠くなる日や練ひはり
 目鏡をもはつさぬ内や時鳥
 かんこ鳥啼や目に付山と山
 御眼覚に召れた坪や郭公
 時鳥啼や矢はせの走り船
 曳舟の声のとぎれや行々子
 渉し場の川幅広し行々子
 句作りもついに逃して郭公
 乳もらひの跡からも来る水鶏哉
 晴て行雲に声あり郭公

尽水 舒堂 素梵 浪府 麦里 竹瓦 千車 走波 穆子 南畝 魯公 溪河 松濤 川子 ちか 桃葉

漬物調味料
 漬物用ナイロン袋
 蒨菜種苗
 果樹・花木・苗木
 麴もやし・殺虫剤

三木金之助



山崎町西鹿沢
 電話六七八三

なふられて聞関守や啼くるな
 五月雨の瀬に手放れて子鴨哉
 閑子鳥淋しからせて啼止ぬ
 川せみや鳴の夕べも此あたり
 来へき宵しらせの雲や郭公
 さくらより空白き夜や杜宇
 共に聞道連もありかんこ鳥
 静さや流石ハ鷹の鳥屋籠り
 雨雲は武蔵鎧やほととぎす
 鷹も足ひやして飛ん日の盛り
 閑子鳥袖ハ昼寝のさかり哉
 幽すとも寝たらぬものを時鳥
 寝ぬ数を誰に語らん郭公
 一声ハ夢か旅寝のほととぎす
 咲残る花もの凄しかんこ鳥
 あやめ草にほう筋より鳴水鶏
 来た道は雲に埋むや閑子とり
 袖人も欠ひ幾つか閑子とり
 降らぬ日も木々の雫や閑鼓鳥
 筒井筒覗く主なしかんこ鳥
 ほととぎすまつや傾く油皿
 雨見ゆる雲のはつれや閑鼓鳥
 麦刈日舌もすくます行々子

東武鴻巣

可野 六幽 夜白 祇東 柳也 吳服 林鶴 菓青 集山 川風 都流 壺龍 和暢 柳枝 里江 布舟 逸貫 遊糸 万化 箕流 葉水 可石 亀峯

仕出
 お年当
 女
 北真所我神社前 乙未二九

塔ひとつ捨てられてあり閑子鳥
 時鳥まつ夜や蚊にもなふられる
 宵月の森にかくれて水鶏かな
 蚤と蚊の世話なれはこそ時鳥
 山門は雲にかくれてほととぎす
 暑き日をゆられゆらるるかもめ哉
 早舟の跡から呼や行々し
 短夜の夢ハ破れてほととぎす
 水音は滝とされてやかんこ鳥
 うつつともなく更行やほととぎす
 餅酒の奢りハあらねと其声にうかれて
 今はた入相におとろく
 ほととぎす入日残して峠かな
 行者山の麓を通る時
 葛城の神を本尊やほととぎす

女 松風
 秋扇
 浮山
 やそ
 観然
 鳥声
 志閣
 はん
 乾中
 甘棠
 蝶翠
 素練

歌仙行

和漢歌員
二花二月式

文房具雑誌
事務用品
御結納用品
和洋紙

志水成文堂

山崎町本町通・TEL五四七番

一声ハ江に横たふや郭公翁

包風若葉羅

旅らしう小つまからけをよるこひて

むかしのふうの今に御守殿

坐鋪除塵少フ

庭前盛露多シ

二千里の外もなかむる月の顔

はなし上手に冷をワするる

何なりとむまい物やの隠居さま

令猫背屈、跣ケ

坂永先々凸

窓も明すにさミたれの空

群百姓、驕、唄ニ

芳山伏、枕、螺ヲ

繩手から切れて幾筋迷ひ道

生干の曲突のけむる生柴

花、随、吹、乱、孰シ

阿丘

素練

仙斧

孤月

蝶水

杏雨

梅里

惠我

耳棠

乾中

蓮子

杏雨

惠我

阿丘

孤月

仙斧

鳥、隠、露、行、何レ

ニ、我、恋、初、雷、晃リ

立身すれハ容う望ミ事

京を見て普請仕様と思ひけり

されと流れを濁す菡ふね

會良、馴、醜、酒

親世、誘、塩、茄

鳥さへ雨に罫をいそくやら

とちらむひても空の只中

千月寺、悲、止

万年橋、喜、過

走、雲、波、玉、兎

う余所の簀入にこちの賑ひ

すかゝきに新酒の酔をおたてられ

笑、薬、鐘、頭、磨

雨脚逃、影、落

障子ひらけは明ひ板の間

はつ雛の花に家内がそへついで

残、寒、草、餅、和

素練

梅里

蝶翠

耳棠

乾中

蓮子

仙斧

孤月

梅里

素練

阿丘

蝶翠

蓮子

惠我

耳棠

杏雨

阿丘

孤月

仙斧

天の橋立秋季見学旅行

九月十七日稍曇りの天候、今度は日本三景の一と云うので参加の方が多く三台の観光バスに殆んど満員で、午前六

時半に山崎を出発しました。福崎より生野和田山を経て八鹿竹田を通過、青々と茂つた但馬の山河を突破し、その辺居住の人々の生活をいろいろ想像しつつ十一時には丹後成相山麓に到着した。随分甚だしい群集の中でした。ケープに分乗して『傘松駅』に昇りました。此所は一目天橋を見下す名所で股覗きの景観は天下の珍として伝えられます。暫く観賞の後、ゲートルにて下り橋立樓にて昼食、午後は近くに鎮座ある元丹後の一の宮『籠神社』に参拝して伊勢本宮の形取つた棟木や国宝の石の駒犬などを拝見して乗船場へ出る。やがて特別仕立の大船に乗船して海上より橋立の松を見て行く。波も静かで時々フェリーボートが樂しげに走るのも興は多い。船は文珠堂の岸に着く、上陸して全員記念撮影をした。こゝで暫く自由行動、開閉して動く橋を見たり橋立の松林を散歩したり、智恵の餅を頬張たり各自思い思いの自然の風物を楽しみつゝ午後四時名残惜しき橋立を出発して豊岡經由で山崎帰着八時であつた。

総 会 案 内

本会の総会を左のとおり開催しますから御出席願います。

○日 時 昭和四十三年一月十日午前十時

○場 所 山崎町 長生会館

○議 題 役員任期満了による改選、決算報告及び

事業計画等

雜 報

○ 十一月三日から五日まで才三回山崎町展が山中体育館で開催、写真、絵画、書道、工芸、民芸手芸の五部約二百点、時期を同じくして下村記念館で菊花展開催、盛会であつた。

○ 千種中郷土研究部は十月十日同校で、千草鉄資料展を開催、話題を呼んだ。尙、西河内で古代たたら跡発見、彌生土器を同時に発見して学界の注目を浴びている。同校では古代から明治までの製鉄業盛衰記を分冊発刊する

会 員 名 簿 (24)

- | | |
|-------------|-------------|
| 三津 梶 本文治 | 三津 梶 本 なつゑ |
| 〃 永 尾 はつ子 | 〃 光 岡 しん |
| 金 谷 森 下 忠太郎 | 中鹿沢 白 谷 よし子 |
| 東鹿沢 衣 笠 実 | |

食料品
青果類
海産物

八百屋商店

田山町 電話 413